



News from TNU

## 天津師範大学卒業式にて

教育学部長 藤田達生

去る6月28日・29日に、一泊二日という正真正銘の強行軍で天津師範大学の卒業式に出席いたしました。例年通り、手作り感漂う雰囲気を満喫してきました。式の始まる時間も終わる時間も正確には決まっていないというアバウトなところが中国らしいし、大らかなところだと、いつも感心しています。

今回の訪問は、先行して堀理事と宮岡・馬原両先生が現地入りして、ダブル・ディグリー制度を発展的に拡大して三重大学全体として天津師範大生を受け入れ、学士課程と修士課程を修了してもらってコンセクティブ・ディグリー制度へと改訂することに重点が置かれていました。

こちらは、先生方の熱心な交渉が見事に実り、無事締結できる見通しとなりました。そして9月23日・24日には、駒田学長が天津師範大学を訪問され、コンセクティブ・ディグリー制度に関する協定の締結が実現しました。

さて、今回は天候も今ひとつで、八里台キャンパスを囲むように高層マンション群が林立しつつあり、大学の周辺を散策することもかないませんでした。したがって現地ネタがまったくありませんでしたので、式辞をご披露してご報告にかえさせていただきます。

本日はご卒業、おめでとうございます。久しぶりに元気な皆さんにお会いできてうれしく思います。

天の原 ふりさけみれば 春日なる  
三笠の山に いでし月かも

今から約1300年前唐の時代に、日本から渡った留学生阿倍仲麻呂（698～770年）が詠んだ有名な和歌です。時の玄宗皇帝に評価されて中国の高官になった仲麻呂は、その文才で李白や王維という有名な宮廷詩人とのつきあいもありました。彼は帰国しようしますが、結局果たせず中国で没します。

ところで、過日、鹿児島県の坊津という古い港町に行ってきました。ここは、かつて遣唐使が中国に渡った基地がありました。たとえば、11年もかけて6

度目の航海の末に日本に来た高僧鑑真（688～763年）も、ここに上陸したとされ、上陸地点には記念館が建っています。彼は、日本の仏教界に大きな足跡を残し、世界遺産となっている唐招提寺を建設し、そこで没します。

時は変わって21世紀の現在、国民同士の文化交流や友好関係はますます重要になっています。皆さんは、大学生活を中国と日本で過ごし、両国から学びました。まさにアジア人の立場から次の時代を築いていただきたいと思います。

冒頭で阿部仲麻呂や鑑真を紹介したのは、仲麻呂は日本・中国・そしてベトナムの高官として、鑑真は中国と日本の仏教界の重鎮として活躍したからです。アジア規模で交流し、その立場からものを考えることができる人、21世紀にはそのような人材が求められていると思います。

私の研究分野は歴史学です。近代史は欧米の時代でした。欧米の史料と方法で歴史像がつけられてきました。それが、進んだ欧米・遅れたアジアという固定観念です。しかし最近の若い研究者は、アジアと欧米の両方の史料を比較しながら地球史の視点からの歴史像を構築しようとしています。

みなさんは、アジア人そして地球人の立場からその才能を生かして、広くそして強く羽ばたいてほしいと思います。あらためて、本日はおめでとうございました。



卒業生と藤田学部長

さくらサイエンスプラン  
『ベトナムにおける高校理科教員養成のための科学教育支援』の実施理科教育講座 後藤太一郎（教授）  
國仲寛人（准教授）

三重大大学の協定校である、ベトナムのホーチミン市師範大学（HCMUP）からは、毎年、日本語研修として6-8名の日本語専攻の学生を受け入れています。しかし、2009年の締結後、これまでに教員養成に関する交流は行われていませんでした。

物理教育を専門としている Dr. Nguyen Dong Hai（以下、Hai さん）から、理科教育関係での交流活動の要望があったことから、昨年12月に訪問したところ、高校理科教員を目指している学生数は一学年に約400名と多く、日本の理科教育について関心が高いことを知りました。そこで、「ベトナムにおける高校理科教員養成のための科学教育支援」のプログラムを企画し、さくらサイエンスプランへの申請を計画しました。



教育学部で実施した物理実験での取組

この交流計画では、日本の理科教員養成に関する大学での講義や実験の受講をはじめ、高校の授業視察や高校生との交流を通じて、日本の高校理科教育を学ぶとともに、先端技術を紹介している科学館で体験活動を行うことで、探究型理科教育のあり方について考えてもらうことを目的としました。プログラムは6月29日から7月8日にかけて実施し、HCMUPで物理教育または化学教育を専攻する学部生・大学院生から選抜された10名と、引率教員としてHaiさんを含む2名が参加しました。

プログラムの1つとして、参加者には、教育学部における理科教育関係の実習に参加してもらいました。物理実験では、パスカル電線と名付けられている簡便な実験装置を用いて電気と磁気に関する6種類の実験が行われました。考えながら実験することで電磁誘導のメカニズムを理解できるようになり、アイデア次第で経費もかからずに優れた教材ができることを実感していました。地学実験では手作り望遠鏡キットの組立をしましたが、ベトナムでは望遠鏡による観察は一般的でないようで、とても感動していました。また、高校訪問では、理科室の整備状況や、天体ドームの設備に驚いていました。天文教育には特に関心を持ったようで、お土産としても科学館で望遠鏡キットを購入していました。

帰国前日の報告会では、参加学生は、10日間の経験は今後のキャリアに重要であり、三重大での授業、高校訪問、科学館での体験などは、これから理科教育を進める上で、多くのアイデアを提供してくれ、また、将来、教員として教えるためのモチベーションとインスピレーションを与えてくれたと熱く語っていました。引率者のHaiさんは、「理科教育者として、科学が子どもや生徒、市民に何をもたらすかを考えているが、今回のプログラムで、単純で楽しい方法で科学を教えるための多くのアイデアをもらった」と述べていました。

なお、このプログラムの期間中、NHK津放送局から取材があり、この取組が5分間でわかりやすくまとめられてテレビ放映されました。このDVDはプログラムを紹介する上で活動紹介する上で役立っています。

参加者全員が、さくらサイエンスプランに感謝し、このような機会を今後も継続してほしいと願っていましたが、受入機関としても継続を進め、さらに多くの学生に新しい教育観をもって貰う機会を提供するとともに、本学の学生にも熱心なベトナムの学生の姿から学んで欲しいと思っています。



修了証を受けた参加者の皆さん